「主題E《国際理解と異文化接触》の運営と「比較文化」、
「総合科目 世界の人々とその暮らし」及び「主題研究」の実施について：1996年度の概要報告と総括」
『大学教育研究―三重大学授業研究交流誌』、第5号、13-34頁

主題Ｅ ≪国際理解と異文化接触≫の運営と、「比較文化」、「総合科目 世界の人々とその暮らし」および「主題研究」の実施について：1996 年度の概要報告と総括

稲 賀 繁 美

三 重 大 学 共 通 教 育 機 構
大学教育研究－三重大学授業研究交流誌－
第 5 号 別 冊
1 9 9 7 年 発 行

13－36

大学教育研究　三重大学授業研究交流誌　1997，第5号，13－34頁

統合教育科目

主題E ≪国際理解と異文化接触≫の運営と、「比較文化」、「総合科目 世界の人々とその暮らし」および「主題研究」の実施について：1996年度の概要報告と総括

稲　賀　繁　美*

はじめに

三重大学の教育改革にともない、全学共通教育では統合教育科目に主題別授業が導入されたが、その運営は、（1995年度の試行に続いて）1996年度が事実上最初の「通常運転」の年となった。組織の面では、本年度はなお暫定的な選出方式ではあったが、一応正式に主題別の分科会が発足した（分科会が授業を担当する専任以上のすべての教官からなる、との認識が事務局の名簿で徹底されるには、1996年度末を待つ必要があったが）。また学生が主題ごとに自主的に研究を纏める「主題研究」も、本年度からスタートした。一方理念の面では、今回の教育改革の目玉のひとつとして、「総合科目」（特定のテーマに沿ったオムニバス形式のリレー授業）と「通常科目」（従来よりの講義形式を中心とする総論）および「共通セミナー」を主題ごとに連動する体制が謳われている。だが、1995年度はなおこの3者を有機的に組み合わせて運営する条件は未整備のままだった。実際の授業の組み立てで、この理念をいかに実現に近づけ得るものかを吟味することも、本1996年度が初めての試みとなった。

以下、主題E≪国際理解と異文化接触≫の場合を取り上げ、本年度の運営の概要を要約する。著者が直接に運営に係わった通常科目「比較文化」、総合科目「世界の人々とその暮らし」および「主題研究E」を中心として、授業立案から実施における現状を分析し、問題点を具体的に指摘したうえで、来年度以降の指針、なお解決すべき課題などを呈示しておきたい。

＊　三重大学人文学部文化学科

なお、この報告は昨年度の『大学教育研究』第4号（1996発行）に掲載した「統合教育における学生の自主的研究活動導入の試み」および「「世界の人々とその暮らし」の5年間」のその後の動向を紹介し、1990年から1996年にわたる（旧）学科目「比較文化」における授業の歩みとその教育改革に伴う帰結（およびなお残る懸案）を総括することをも、併せて目的とする。

1. 主題E≪国際理解と異文化接触≫の運営

主題Eとして授業カリキュラムを有機的に組織・立案し、実際に運営してゆくためには、単なる教務上の事務処理を越えたところで、分科会としての授業への取り組みを、教育上の見地からも不断に検討してゆく必要があろう。しかしながら、本年度は1997年度導入の「セット履修」の義務化に伴って必要となる「共通セミナー」開講数を確保する事務作業と合意形成に、カリキュラム専門委員会と統合部会とが膨大に労力と時間を奪われたため、分科会レヴェルで授業の実際について議論を重ねる余裕は、物理的にも精神的にも到底存在しなかった。このため、分科会としては、次年度の正副部分科会長の推薦と、カリキュラム専門委員会からの付託事項への答申といった事務事項を、いわば形式的に処理するにとどまった。

実際、主題Eの場合、主題責任者がたまたま外国語部会長をも兼任したため、共通教育関係の諸委員会への出席や部会の主宰が錯綜するのみならず、全学の教育改革委員会や学部の諸委員会とも会議開催日時が競合したため（とりわ

け人文学部の共通教育委員会委員長をも兼任)、主題研究Eの分科会を開催する時間枠を設定することそれ自体が、物理的に不可能に等しかった。冒頭から共通教育機構の運用上の制度的未成熟を指摘することとなるが、正副部会長の任にあるものが、それ以外の部会の分科会長をも兼任することは、現在規程のうえでは妨げないこととなっている。だが、本年度の経験からして、このような状況では、部会、分科会の正常な運営が著しく阻害されることが明確となったことは否定できない(なお同様の問題は、学務、カリキュラムの両専門委員長の選出についても存在する)。

このため分科会の運営では、昼食の時間に分科会を構成する授業担当教官に無理にお集まりいただいて、統合部会での申し合わせや付託事項を説明する、という対処を余儀なくされた。ここで運営上とりわけ問題と感じられたのは、特定の主題に属する専任の授業担当者が複数の学部に属し、また人文学部内でも複数の学科に分散しており、さらに個々の教官の多くが同時に複数の分科会に属している、という複雑な事態である。勢い、事務連絡は繁雑なうえに、時間調整はつかず、さまざまな重複と欠落が至るところで出体した。加えて、正副分科会長の候補者推薦でも、複数の分科会同士で競合が発生したが、結局その解決にはそれらの候補者が属する「学系」(人文学部の場合)あるいは教室(教育学部)の内部調整に待つしかなかった。つまり分科会として、その正副分科会長を推薦する作業のイニシアティヴを取ることすら、組織論理のうえからいって、不可能に近いことが露呈したことになる。

さらに、主題としての授業の組織化には非常勤講師のご協力を仰ぐ必要も生じるが、非常勤講師を含めた会合を招集することは、分科会の権限では無理であり(部会レヴェル以下の書類や会議には事務局は関与しないため、部会や分科会レヴェルの文書は、単なるメモに過ぎない)、また分科会レヴェルで非常勤講師の採用推薦や個人的なお世話をすることも不可能(これは実際には旧来の学科目に相当する学系の管轄であり、事務処理上はあくまでも共通教育事務室の職権、書類のうえでは、資格審査は学務専門委員会、カリキュラム立案はカリキュラム専門委員会と、担当が複雑に分岐している)という限界にも突き当たった。

また、主題別にカリキュラムを立案することが理念上謳われていながら、実際には旧来の学科目に相当する学系に出講計画書類(いわゆるABC票)を送付するしかない(すなわち、実際上、分科会レヴェルでカリキュラムを主体的に組む作業は実行不可能であって、共通教育機構の機構図上では、その「外部」に存在する学部組織に頼らなくては、カリキュラムが作成できない)、という現実にも、主題別科目群運営上の組織的な弱点が端的に現れている。

最後に、こうした弱点の齎す不可避な状況として、実際に授業を担当する教官からは、共通教育の運営の不透明さに対する不満を数多く聞かされることとなった。非常勤講師のなかには、長年ご出講を戴いていながら、共通教育への移行にともなって、再度履歴書と業績表の提出を依頼されたことにたいする不快の念を表明される場合があった。また専任教官の場合には、共通教育委員会での議決事項が、学部教授会での形式的な口頭報告以外にはまったく連絡されず、共通教育事務局から配布される書類が理解しがたく、対応不能という状況に陥っている現状への不信感が募っている。その間で部会長、分科会長は、膨大な書類の作成を余儀なくされながら、機構と現場との板挟みとなる場面も少なくなかった。要するに、現場の教官からは共通教育機構が見えにくく、逆に共通教育機構の委員会に関与している委員側からは、(分科会に属する)現場の教官の顔がまったく見えて来ず、声も聞こえてこない。こうした意思疎通の不全は、決定事項の伝達過程でしばしば誤解を招き、共通教育の現場での士気低下にもつながりかねない(遺憾ながらこれは現実に発生している事態だ)。

このように本年度の運営を通じて、機構の組織上、運用上の難点がようやくはっきりしてきたが、本年度のところ、こうした制度上のネッ

クを解消する手立ては、容易に見いだせなかったというのが、少なくとも主題Eの運営に関する限り、正直な評価である。

2．主題Eにおける「比較文化」の位置と役割

通常科目として開講している「比較文化」は、人文分野として前期金3－4限に実施した。主題Eの理念に照らして、授業のテーマとしては「異文化接触の倫理にむけて」と銘うった。実際の授業の組み立ては、昨年度の報告を参照いただくことにして、ここでは省略したい。授業の目標としては以下の文章を掲げた。

「1）大学入学後の半年間で、大学での教育の心構え、資料収集、リポート作成などの基本を実際に身につけたい。2）正解を暗記し、先生の話したことを繰り返し、百科事典を写すだけ、という勉強型からの脱皮をはかり、問題設定、調査グループの設定と運営、結果報告、討論をとおして、さまざまな価値観の対立のなかにある社会の仕組みを体得したい。3）自分とは価値観やものの考え方の違う人々といかにして付き合ってゆくか、実際に体験しながら、異文化に開かれた知性と感性を身につけたい。異文化にすなおに驚く感性、その文化を支える仕組みを理解しようとする知性、そして価値観を異にする人々とも共感できる情操を養う訓練として、身近かな話題を出発点として、“比較文化”を現代に生きる知的態度として体得したい。関心のある問題について仲間といっしょに考え、調査し、発表し、討論し、具体的な目標を立て、自主的な研究グループで研究を進め、学期末にその成果をまとめたい」。

「通常科目」での「比較文化」の授業と並行して、本来ならば「共通セミナー」として、学生によるグループ・リサーチも開講したいところではあるが、担当者の開講負担の関係でそれが不可能なため［註1］、同様のグループ活動を、授業の課外活動として義務づけている。第1回目の学生の意識調査から始めて、数回のアンケートで徐々に学生の関心を励起し、具体的な話題を列挙させ、その話題ごとにチームの自主的な形成を促してゆく。本来ならば5月の連休前にはチームがおおよそ固まっていることが望ましいが、本年はこの作業にやや手間取り、グループの形成は連休あけとなった。グループは実際に活動を始めると、さまざまな問題にぶちあたる。そこで学生たちは、はじめて質問の手をあげ、相談を求めるようになってくる。

こうした学生諸君の相談に乗るため、（無償のサーヴィスとして）金曜日の午後7－8限をオフィス・アワーに当てた。これは後期には「主題研究E」のオフィス・アワーに当てたのと同一の時間帯である。1997年度からはこのオフィス・アワーも時間割に明記する運びとなったが、実際にはその時間帯に授業があって差し障りのある学生も多く、グループ活動や主題研究の学生との対応は、授業と委員会以外の研究室在室時間全般に“蔓延”するに至った。「研究中」を理由に面会を拒むのは不可能だ。だが「共通セミナー」や「主題研究」のお世話をした教官が結局自己犠牲覚悟ですべてを引っ被る、というのでは、授業改革も、一部の物好きでお人よしの少数の“変人”教官の自己満足だけで終わってしまいかねまい。この点でも、セミナーの実際の運用には、まだ制度的に未成熟な点が残っていることが確認された。

こうした学生との接触を土台に、学期末には、授業での知見を生かしつつ、グループでまとめた論文集の提出を義務づけた。そして後期にできるかぎり「主題研究」に登録して、主題研究論文へと発展させるように促した。本年度、学生たちがリポートにまとめた研究主題は［資料2］の通りである。なお、従来、グループとしての提出の形式的要件が不備で、個人の責任担当の区分が不明な論文集や、連絡先、執筆者一覧、目次などの欠落などで、採点の上で不都合が生じる場合がしばしばあったため、［資料1］のように、書式の要件を学生に呈示することにした。いらぬお節介にも見えようが、実際にはこうした“常識以前”のところでつまづく学生が半数以上－という状態であり、それは毎年着実に悪化の傾向にある。センター試験の穴埋め

以外何も要求されない学生たちの、唯我独尊と受け身で消極的な無能力化を長らく放置してきた、この国の教育の空洞化への危惧を、今一度強く表明せずにはいられない。

［資料１］比較文化 1996 年度　レポート提出書式

☆袋／封筒に入れて提出させること。その表書きには、以下の事項を盛ること。
比較文化 1996 年度リポート［提出先を明記すること、また必ず一冊に綴じ込むこと］
研究課題名：
目次および執筆分担
研究代表者氏名および連絡先：
目次：　　執筆項目
　　執筆者　氏名　学生証番号　学部名

［資料２］1996 年度のグループ活動リポートの題目一覧［適宜、分野によって分類した］

［ABCD の符号は、教官によるリポート全体としての評価を表す。１－２－３は章立て］。

≪国際環境≫

B：JICA を考える［１．協力隊の活動内容　２．NGO と ODA　３．協力隊員の話から：問題点　４．協力隊員の話から：理学療法士　５．ヴォランティアと企業　６．帰国後の進路　７．女性の活躍について（７名）］

B：大学の国際的比較［１．教育制度　２．設備の比較　３．システムのいろいろ　４．学生の授業評価 結論、謝辞、参考文献、資料、インタヴィュー（４名）］

A：中国帰国者問題と日中の戦後観の比較［はじめに １．中国残留邦人の生まれた背景　２．帰国者の生活　３．日中の戦後教育の比較　４．教科書に見る日中の歴史観の相違 結論 あとがき（４名）］

B：外国人労働者と日本語教育［はじめに 本論：(1)宣教師に聞く　(2)日系人と企業のニホンゴ　(3)英会話教室の外人教師に聞く；結論 参考文献と資料（３名）］

≪身近な文化問題、社会問題≫

A：愛知万国博覧会を考える［序、本論(1)新聞記事の分析　(2)愛知県側のヴィジョン　(3)地元民から迫る　(4)地元有志の描く万博像　(5)“ばんぱっくん”に聞く；まとめ感想（５名）］

A：津、鈴鹿、久居におけるゴミ収集の比較［１．調査目的、目標、方法とその日程　２．津市環境事業課に聞く　３．白銀環境清掃センターを見る　４．津市西部清掃工場の場合　５．鈴鹿市清掃センターを訪ねる　６．久居リサイクルセンター　７．結論（４名）］

A：廃棄物処理の現状と対策［はじめに、現状:定義、処理場の種類と問題、廃棄物の排出、地方自治体の要望、不法投棄、リサイクル、小山処分場見学;まとめ 参考文献と資料 あとがき（７名）］

B：大学内の自転車の状況［はじめに１．三重大学の現状　２．問題の原因　３．調査結果　４．地図とその分析　５．時期による比較　６．学校側の対策とその効果　我々の提言：結論にかえて 編集後記（４名）］

B：国立大学学生における地元出身者の比率の地域差［まえがき１．男女比　２．地元占有率　あとがき（１名）］

B：英語を話せるようになる教育・ならない教育［序、現状、問題点、中学の教官・生徒へのインタヴュー、外国の事例、英語科の先輩へのアンケートとその分析、結論、文献、あとがき、謝辞（３名）］

A：教科書検定制度について［序　１．検定制度、新旧の比較　２．教科書裁判について　３．従軍慰安婦について　４．アンケートの計画と挫折:失敗談　６．総括（７名）］

B：近鉄［はじめに 作業日程 本論:運賃改定について 新聞での扱い 従業員の仕事 車輛について 鉄道事業の機械化と効率化 鉄道以外のサーヴィス業務 志摩スペイン村;結論 文献・資料、あとがき（７名）］

B：ヴォランテイアについて［第一部：歴史 日本の場合 世界の事例 海外との比較 自由主義国　社会主義国 開発途上国　内での現状と問題点 実務ノート：アポイントメント　第二部：体験を通じて:老人福祉、自閉症者と共に開くキャンプヴォランティアに参加して、神戸の場合 おわりに（７名）］

B：今なぜ再生紙なのか［１．エネルギー・コスト　２．メリットとデメリット　３．トイレットペイパーの場合　４．企業６社の考えを聞く　５．製材会社の考えを聞く　６．市役所の対応（６名）］

C：銃について［はじめに１．銃神話　２．銃

社会アメリカ　3．アメリカの銃事情　4．各国の銃問題　5．陪審制度について　まとめ（6名）］

B：銃規制と裁判［拳銃犯罪の拡散　密輸　国際的動向　政府の対応　銃規制の現状　広報活動　服部君事件と規制運動　陪審員制度について］

D：日本の治安は本当に良いのか［はじめに　本論　結論　参考文献　あとがき（1名）］

B：国際結婚について　はじめに、本論:現状　問題点　インタヴュー；結論 文献・資料　あとがき（3名）］

≪実地調査≫

A：老人施設について［前書き 本論：歴史 入所条件 部屋の設備 痴呆について 行事 一日のスケジュール 自由時間 食事 風呂とトイレ サーヴィス 職員; 調査活動日程、後書き 資料 （2名）］

B：老人ホームについて［動機、意図、目標、活動記録、1．老人問題　2．ホーム3種類の比較　3．ユートピア九十九の場合、4．清風荘の場合－入所条件、処遇、行事、経緯、問題点。感想］

B：明治の生活、建築について－明治村を調べて［1．明治時代の住居　2．明治の政治と社会　3．明治の生活文化（3名）］

A：ふるさと創生1億円の行方を振り返る［はじめに1．具体例　2．目的と内容の比較　結論　あとがき（1名）］

B：自衛隊見学［歴史　現状　隊員の生活：インタヴィュー　あとがき　謝辞　参考文献（3名）］

B：志摩スペイン村について［前書き　概要　経営　社会的影響　後書き　（2名）］自衛隊の現状［防衛の基本原則、自衛隊の任務、久居駐屯地の歴史、自衛隊の意義、隊員への質問、資料館について、結論、資料（5名）］

B：節水について［はじめに　名古屋の場合　津の場合　近年の渇水とそれへの対応　結論　（3名）］

B：三重県総合文化センターを調べる［はじめに　本論：センターの沿革、経営の実態、企画発案と決定機構、イヴェント、自主事業；　結論　文献資料、あとがき（5名）］桑名弦楽合奏団の運営［まえがき、発足、運営、見学、問題点と意見、あとがき（4名）］

≪文化史的視点≫

D：美人論［1．東西の類型　2．明治以降の美女の変遷　3．最近の傾向と国際環境（3名）］

≪他の授業で指導をうけるべき主題≫

C：農民闘争に見えるネットワーク［2名、バラバラに提出］［日本中世史；比較史］

C：『三国志』にみえる中国と日本の好まれる人物像［はじめに、1．歴史　2．現状　3．日中比較　4．問題点　結論、文献、資料、後書き（3名）］［中国文学、比較文学］

C：核問題とわたしたち　［はじめに、平和利用の実態　戦略としての核　中国の核実験　留学生の意見　あとがき（1名）］［平和問題、国際関係論、環境問題］

C：生活水準の国際比較［健康　経済　勤務時間　教育　まとめ（2名）］［社会学、統計学］

D：ワリバシを考える［問題提起　消費の実態　歴史的背景　再利用の現状　森林と環境問題（6名）］［環境論、生物資源学部］

B：三重県内の方言［はじめに（動機、目的、方法）、名張、「やんか」、伊勢、志摩、おわりに（（5名）］［国語学］

B：死刑の現在を考える［はじめに　日本の死刑　アジアの死刑　死刑廃止条約（1名）］［法律学］

B：三重県知事選挙［調査の目的、選挙概要、問題点、結論（2名）］［政治学］

2．「主題研究E」の試み

前期のグループ活動報告のリポートを基礎にして「主題論文」執筆を促すべく「主題研究E」を設けた。前期のリポートはすべて添削のうえ講評を付し、また「主題研究E」への登録を促す説明書と、論文制作のうえでの注意事項を、実際のリポートで数多く見られた欠点や欠落に即して与えておいた。とりわけ優秀なリポートには、是非「主題研究」に登録するようにと促しておき、3割程度の学生は登録してくれることを願っていたのだが、結果としては、学生は極めて消極的で、今年度の「比較文化」受講者で「主題研究」に登録した学生はわずか4名、昨年度受講者からは1名、それ以外（東廉先生

の授業受講者）が1名に止まった。［資料2］でAの評価を与えたリポートの多くは、添削した部分を訂正のうえ書き直せば、十分論文集として公刊するに値する貴重な研究ばかりだっただけに、熱心に宣伝したのに大多数の学生たちが登録してくれず、それらのリポートをもはや2度と見ることができなくなり、活字にして残す手立ても失ったのは、「主題研究」実動の1年目としては、まことに遺憾であった。

学生たちが登録しなかった理由としては、何人かの学生からは、(1)主題研究は義務ではないから、(2)チームの他の参加者が登録しなかったので足並みが揃わなかったから(3)何をするのかよくわからないから(4)主題Eには登録していなかったから、登録を諦めた、などと、登録期限後に手遅れになってから言ってきた。あきらかに、「主題研究」の意義や登録方法を学生に適切に伝達することに失敗していたことになる。また、単位さえとれればそれでおしまい、という学生の意識を変革するにも、まだ課題は多い。とはいえ、前期の「比較文化」登録者に後期「主題研究E」への登録を義務づけることは、カリキュラム上不可能である。また全員が押し寄せれば、ひとりの教官では到底対応などできない。なんとか優秀なリポートにはそれにふさわしい評価を与えて、学生の意欲を引き出そうと意気込んでいただけに、この結果にはいささか意気阻喪させられた。

また実際に研究指導をお願いした先生とのコミュニケイションがうまく行かなかったケイス、呼び出しをしても学生がやってこず、成績物提出締め切り当日にようやく出頭したために、今学期は単位認定不可能となったケイス、など実際の指導でも、教官側、学生側ともにまだ不慣れな面が多く、学期末に論文提出に漕ぎ着けた学生は、結局2名のみ、のこり3名は来年度以降を目指した指導をするにとどまり、のこる1名は途中から棄権したのか、顔を見せなくなった。登録や単位認定の方法も、まだ制度上不明瞭な点が散見された。

それでもこの程度の学生の相手だけで、卒論指導の負担が一挙に倍増したのに等しい時間と手間とを取られ、おまけに、最初予定していた論文集は結局発刊も諦めるという、はなはだ不本意な結果に終わった。論文集の作成は主題単位での自主的な創意に任せるのもよいだろうし、すでにそうした努力を個別に実らせている教官も少なくはない。だが、本来なら予算措置をも見込んで、将来には共通教育機構として対応できることが望ましいだろう。

3．総合科目「世界の人々とその暮らし」の運営

後期はこの「主題研究E」と並行し、また前期の「比較文化」概論を受けて、総合科目を開講した。「世界の人々とその暮らし」である。だがその準備は1995年秋に溯る。一年前に早くもシラバス作成のため、出講伺いをしておく必要があるためである。その段階の立案を［資料3］に示す。この意向調査がシラバスの原稿をも兼ねる。なお毎年開講していると、手紙を受け取った講師の側でその年の出講日確認と来年度の予定とを混同されるという、思わぬ事故が発生した。なにしろその年の出講も今から先という時期に、まる1年先の予定をお伺いするわけで、紛らわしいことはなはだしく、1996年1月と1997年1月を取り違えるのも無理はない。またこの時期にはまだ学年暦がなお未定のため、センター試験前日に当たって授業が不可能ということが、予定を立てたあとで判明する事故も発生した（1997年1月17日の場合）。さらに書類の日付ミス（1月30日は31日の誤り）で、予定していたアポイントメントにしくじる（時間割では11月8日とあったものを、学生用の授業概要ではうっかり11月18日と誤記）など、本年は些細だが決定的な失策が多く、講師、学生諸君双方に多大な迷惑をかけたことを、この場を借りてお詫び申し上げる。“多忙”など理由にもならないが、正直、限界を感じた。

［資料3］総合科目「世界の人々とその暮らし」ご協力依頼書（1995年10月初旬郵送）
本年度もご協力をいただきありがとうござい

ました。はやくも来年度の予定を立てなくてはならない時期となり、まことに失礼とは存じながら、ご都合をうかがう手間を省き、当方の一存ですが、仮に（あくまで仮に）以下のような予定を立てさせていただきました。

ご協力いただけるようでしたら助かるのですが、来年度のご都合など、いかがでしょうか。もし差し障り、題名や日程変更のご希望、11月15日までに稲賀までお伝えくださいませ。

またもし自分のご担当の際にお呼びしたい非常勤講師がおありでしたら、生年月日、学歴、職歴、現職、現住所を明記した書類を添付して、11月15日まで稲賀へご報告くださいませ。

総合科目　世界の人々とその暮らし　人文分野
金3－4　開講責任者　稲賀繁美

●講義テーマ

日本の社会環境とは違った価値観、比較にならない物理的環境、社会的環境で生活する人々の姿を、現地でのフィールド体験豊かな教官から、現場に即して語っていただく。日本ならざる視点から日本を見直して、我々の日常に反省を加える機会としたい。

●目標

日本の生活水準を当然と考え、日本の流儀や常識が通用しない文化圏をすぐに蔑視したり拒絶する態度を取る「内向き」の日本人が多くなりました。ところが実際には日本はこれら海外の人々の暮らしに直に大きな影響を与えています。異文化にすなおに驚く感性と、その文化を支える仕組みを理解しようとする知性、さらには価値観を異にする人々とも共感できる情操を練ることが、この総合科目の目標です。

●授業の概要

1996年度（日程は予定、内容も仮のもので、変更の可能性があります）

(1) 10月11日　稲賀繁美　異文化とどうつきあうか：開講主旨説明
(2) 10月18日　鈴木基義＋千葉洋子、斎藤寛　ラオスの経済援助と日本（1）
(3) 10月25日　鈴木基義　ラオスの経済援助と日本（2）
(4) 11月1日　武笠俊一＋韓景旭　北アジアの経済発展と日本
(5) 11月8日　戸谷　修インドネシアの近代化
(6) 11月15日　荒井茂夫　華僑、華人ネットワークから見た東南アジア
(7) 11月22日　サンガ　アフリカ村おこしの現場から：ザイールの事例
(8) 11月29日　目崎茂和　サンゴ礁に生きる人々
(9) 12月6日　安食和宏　マングローブ林と日本人：東南アジアの環境
(10) 12月13日　石井眞夫　南太平洋の島々：フィジーの文化
(11) 12月20日　吉田悦子　イギリスに暮らして
(12) 1月17日　斎藤　明インドとは何か
(13) 1月24日　野中健一　カラハリ砂漠の生活の知恵
(14) 1月30日　加藤隆浩　ラテン・アメリカのフィールドから
(15) 2月7日筆記試験

この「伺い」への講師からの要請に応じ、非常勤講師の変更、日程の調整などを経て、シラバスの原稿提出が1995年11月下旬となる。シラバスは翌年4月、学生たちの手に渡ることになる［資料4］。なお本年度のシラバスはあまりに大部で重たいため、学生たちはかえって読む意欲すら失ってしまったらしく、入学直後の4月の第一回目の授業の時にもほとんど持参しておらず、ましてや後期の開講時には、ひとりとして携帯していなかった。これでは逆効果である。文部省の書式変更通達、シラバス作成の奨励、ダイレクト印刷のための書式導入などが重なって、1990年以来数年間で重量、かさともに、あっというまに16倍以上に膨れあがってしまったシラバスは、ここらで逆に軽量化を目指す必要が生まれてきたようだ。

こうした準備を経たのち、1996年9月に、改めて講師にたいして、最終授業計画を郵送し、また必要な書類の提出を求める。すなわち、学生への授業案内、参考文献、学生リポートの課題、そして期末の筆記試験問題である［資料5］。これらは、毎年の学生アンケートによる要望から、講師にお願いしたものだが、これだけの要求となると、新学期前の多忙期での繁雑な書類のため、期限までにご返事をいただけない講師も出てしまって申し訳なく思っている。ただし、そのためもあって、本年度も学生から、もっと早くリポートの課題を示して欲しかった、

といった苦情を頂戴することになる（学生アンケートの結果については後述）。

［資料４］三重大学総合科目「世界の人々とその暮らし」学生用通知　1996年４月

開講責任者：人文学部　稲賀繁美

●授業の概要：

1996年度

(1)　10月11日　稲賀繁美　異文化とどうつきあうか：開講主旨説明

(2)　10月18日　鈴木基義＋千葉洋子、斎藤寛　ラオスの経済援助と日本（1）

(3)　10月25日　鈴木基義　ラオスの経済援助と日本（2）

(4)　11月1日　武笠俊一＋韓景旭　知っているかな・中国の社会と文化

(5)　11月8日　三宅郁子［講師変更］マレーシアの社会と言語

(6)　11月15日　安食和宏　マングローブ林と日本人：東南アジアの環境

(7)　11月22日　サンガ　アフリカ村おこしの現場から：ザイールの事例

(8)　11月29日　目崎茂和　サンゴ礁に生きる人々

(9)　12月6日　荒井茂夫　華僑、華人ネットワークから見た東南アジア

(10)　12月13日　石井眞夫　南太平洋の島々：フィジーの文化

(11)　12月20日　川島正樹　ボストン暮らし

(12)　1月17日　吉田悦子　イギリスに暮らして

(13)　1月24日　野中健一　カラハリ砂漠の生活の知恵

(14)　1月30日　加藤隆浩　ラテン・アメリカの「目玉取り魔」って何だ

(15)　2月7日筆記試験　［出席確認と具体的知識の定着のため］

●授業は　毎週金曜日　3－4限（10：30－12：00）、共通教育190番教室（220名収容）の予定です。

●スライド、ヴィデオ併用。

●予定変更などは掲示板に貼り出しますので、注意してください。

評価の方法

●学生各位は学期を通じて3名の教官の課題に随時リポートを提出します［掲示と締め切りに注意］。その3点のレポートと、以下に述べる筆記試験の点数の総計で成績を決定します。

●リポートの課題は、授業で伝達した知識の単なる反復や、辞典からの専門的知識の抜き書きではなく、授業を出発点として簡単な資料請求や、新聞切り抜きの比較、推薦図書の参照を行い、あらたな視野を開く切っ掛けをつかめるような課題を、と考えています。

●筆記試験の問題（学生の出席と知識の獲得とを客観的に確かめる目的で実施します）。

7つ程度の用語（是非学生に記憶してもらいたい基本的な用語で、授業中に説明するもの）を空欄にした問題文章の穴埋め問題です。授業中に確実に情報をノートに取る訓練です。

14名の講師から7題で合計98点の客観試験、あとの2点はアンケートで総計100点満点です。

［資料５］三重大学総合科目「世界の人々とその暮らし」教官あて依頼書

1996年9月15日

担当教官各位　　開講責任者　稲賀繁美

（いろいろお世話様でした。本年限りでお役御免となります）

前略、

本年も標記の科目へのご出講を快くお引き受けいただきありがたく存じます。

1．仮の日程は以下のようになっておりますが、変更が必要でしたら、10月7日までにお知らせくださいませ。

2．また10月7日月曜日必着で、以下の書類をお願い申し上げます。

(1)　200－400字程度の講義のレジュメ（複写のうえまとめてシラバスとして学生に配布します）。

(2)　これに付随して、学生への推薦図書がありましたら、数点列挙してください。

(3)　学生への課題リポート（400字5枚程度）の「課題」を200－400字程度でお願いします。

学生は学期を通じて3名の教官の課題に随時リポートを提出します。その3点のレポートと、以下に述べる筆記試験の点数の総計で成績を決定します。

リポートの課題は、授業で伝達した知識の単なる反復や、辞典からの専門的知識の抜き書きではなく、授業を出発点として学生が簡単な資料請求や、新聞切り抜きの比較、推薦図書の参照を行い、あらたな視野を開く切っ掛けをつかめるような課題を、

と考えております。

(4)筆記試験の問題（学生の出席と知識の獲得とを客観的に確かめる目的で実施します）。（4－1）7つ程度の用語（是非学生に記憶してもらいたい基本的な用語で、授業中に説明するもの）を空欄にした問題文章と（4－2）その回答とをお願いします。

14名の講師から7題で合計98点の客観試験、あとの2点はアンケートで総計100点満点です。

参考までに昨年の(1)レジュメと(4)試験問題のコピーを同封します。

以上(1)－(4)はそのまま複写して学生に配布します。ワープロにて戴けると助かります。

授業は　毎週金曜日　3－4限（10：30－12：00）、共通教育190番教室（220名収容）の予定です。

スライド、ヴィデオ上映可能です。ご利用のかたはあらかじめ稲賀までご連絡を。

個々の授業の、担当教官各自による案内文はここでは省略するが、本来こうした記録はこの『研究交流誌』などの紙面を借りて、きちんと残すべきものだろう。なお、実際の実施に際して若干の変更があった。まずセンター試験のため実施不可能となった1月17日の吉田先生の授業（予定立案段階では日程がまだ未定だった）は、放課後の別の時刻に補講扱いで実施したが、出席できない学生からは不満の声を頂戴した。1年前に予定を組まなければならないという無理が露呈した部分である。また1月31日の加藤先生の授業は、おりからのペルー日本大使館人質事件もあって急遽予定を変更し、トゥパック・アマル革命委員会やセンデロ・ルミノーソについて日本でもっとも豊かな情報をおもちの加藤先生から、マス・コミの不正確で誤解をまねく報道を裏を暴く、貴重なお話しを伺えたことを特に記しておきたい。

またそれ以外の補講では、本年度も留学生日本語スピーチ・コンテストを「補講」として組み込んだので、それに関する案内の文章のみ、学生に10月11日に配布した資料から紹介する［資料6］。リポート作成法に関してやや詳しく触れているのは、必要な前提（4W1H）や具体的な情報のまったく欠如した情緒的「感想文」ばかりが現れる点への反省の結果であるが、本年度の場合、あまりにこうした形式要件を喧しく言い過ぎたためか、かえって学生が萎縮して、表面的な奇麗事の“よい子”的作文へと逃避するという逆効果も現れ始めた。高等学校までの作文教育が主観的な「感想文」と客観的な事実の引き写しの「リポート」、ないしは受験技術としての「小作文」に自己限定してしまい、「論述」も「事実伝達」もほとんど自分の仕事とは思ってもいない大学生ばかりが溢れている現状に、ここ5年つとめて是正を試み得て来た。しかしながら、そうした教育的配慮もここにきて限界が露呈してきたことは否定しがたい。ますます脆弱になる学生たちを発奮させるのに有効な技法が、アメであれムチであれ、年々希少かつ手薄になってゆくという頼りなさを、今年ほど痛感させられた年もない。

とまれ、昨年も触れたように、異文化接触を生に体験できる機会として、留学生スピーチ大会は貴重であり、学生による感想文や意見の取りまとめにつき、本年度も日本語・日本事情の森有紀先生の前向きなご助力を賜ったことを、感謝とともに付記しておきたい。ただ、主題責任者個人としては、スピーチ大会の当日、補講の掲示に記した非常勤講師のお世話が重なったため（それも2名同時）、スピーチ大会そのものには、遺憾ながら欠席するしかなかった。授業改革の工夫はまだまだ不十分との自覚はあるが、もはや個人で何とかするには物理的に不可能なことが多すぎる。教育の現場を活性化する「主題」の運営など、しょせん主題責任者ひとりがいかに奔走したところで、滑稽な一人芝居に終わるしかないだろう。

［資料6］補講のお知らせとリポートの要領

12月18日（水曜）午後　三重大学留学生スピーチ・コンテスト

リポート課題：外の目で日本を見直すとどのような新しい発見や反省が生まれるか。留学生（A．名前を明記）の発言を何点か（B．小見出しを立てること）に絞って要約し、さらに諸君独自の事例（C．経験や書物－たとえばサン

ガ先生の著作－から得た情報）によってそれを補強なり反論なりして、諸君の見解（D.）を述べよ。
(1)冒頭で、諸君の考察の出発点となったスピーチ大会について導入（4W1H）をきちんと記し、(2)結論で「よりよい日本」のために諸君自身は何をしてゆくのか、具体的な提言をせよ（他人任せの一般論は無意味）。(3)また参考にした文献はきちんと明記し（シラバスの文献表の書式を身につけよ）、文中に「引用符」（ページ数）をつけて確実に引用して生かすこと。
以上（A，B，C，1，2，3）の形式的用件と内容とで評価する。単なる感想や事実の要約のみは不可。参考文献：＊◎ピーター・フランクル『数学放浪記』晶文社　1992　［ハンガリー］
＊ペン・セタリン『わたしは“水玉のシマウマ”』講談社　1994　［カンボジア］
12月17－19日（詳しくは人文学部校舎の掲示板で確認のこと）
内藤正典（一橋大学）トルコ移民とドイツ社会（集中講義）
参考文献：＊◎内藤正典『トルコのものさし日本のものさし』筑摩書房　1994
内藤正典（編）『もうひとつのヨーロッパ』古今書院　1996

4　総合科目と共通セミナーの接続の可能性：学生への課題の達成率

主題Eで1996年度筆者が担当した科目の学生合格率は［資料7］のとおりである。「比較文化」がほぼ前期の授業の平均合格率に合致しているのに比べ、後期の総合科目「世界の人々とその暮らし」は、本年もかなり低い合格率に止まった。後期の平均合格率はこれまで（点検評価の日程上の都合というおそまつな理由で）集計されたことがないので、安易に比較する事は謹むべきだろうが、「世界の人々とその暮らし」が学生負担のかなり大きな総合科目であることは、開講責任者も自覚のうえ、あえて学期中にリポート3通以上、期末に筆記試験による出席確認を課しており、そのことは学生にもあらかじめ予告済みである。

［資料7］学生合格率

	比較文化	世界の人々	主題研究E
登録者数	187	172	6
合格者数	133	68	2
不合格者数	99	0	
途中放棄	45	103	［来年度へ繰り越し］
合格率	71%	40%	

「総合科目世界の人々とその暮らし」で学生に課しているリポートの課題一覧は［資料8］に示す。本来ならばこうした課題は、主題科目群のなかで総合科目と並列して実施されるべき共通セミナーの学期末課題とすべきものであろう。今のところその余裕がないために、学期に3通、必ずしも教官の指導もないままに、こうした課題を学生に課すままにして放置しているが、これは旧制高校の時代ならばいざしらず、今日の学生を相手にしては、とても通用しない乱暴な措置というほかあるまい。とはいえ、客観的な条件として、すでにこうした共通セミナーを担当しうる教官が主題科目のもとに集っていることも、［資料8］で確認できる。

問題はそれにもかかわらず個々の担当教官（とりわけ「応分の負担」を背負う共通教官］）に、現在の義務に加えて共通セミナーを開講していただくだけの余裕がもはや望めないという現状だろう。もとより主題Eを名実ともに健全に運営することは、とてもひとり「比較文化」担当者（学科目そのものがひとりの運営）のみでなしうることしではない。主題Eの総合科目によって学生が得た知的関心を、自主的な調査や発表を通じて発展させ、根づかせるための科目として、将来十分な数の共通セミナーが、主題Eの運営の一環として開講されうるように、教育環境が改善されることを祈りたい（現在の「応分の負担」を負う教官には、もはやとてもこうした追加負担に耐え得る余裕はない。その点から見れば「応分の負担」に関する原則を、カリキュラム運営と切り離して全学で機械的に決定してしまったことは、教育内容の改革にとって、かえって足枷となってしまった面を否定しがたい）。

総合科目、通常科目そして共通セミナーがより有機的に組み合わせられるような将来の主題別授業構想への展望のために、［資料8］を活用していただければ幸である。

［資料8］担当教官から提出されたリポート課題（いずれも400字5枚程度）

●青年海外協力体の事業について資料を請求して調査し、授業との関連でそのあるべき姿を提案せよ。／日本の戦後の国際援助のあり方につき、具体例に言及して分析のうえ（資料、参考文献をきちんと利用のこと）、授業で示された見解の当否について論ぜよ（12月19日締め切り）。

●中国人の行動パターンとその倫理観について、授業での教官の説明を具体的な実例や文献に見える類例と比較して分析し、その適・不適を論証のうえ諸君の見解を示せ（12月19日締め切り）。

●もし私が同時代のマレーシア人だったら（ただし帰属するエスニック・グループや社会階層、居住地域は自由に選ぶ）という仮定のもとに、自分自身の経験や収集した資料も活用して、以下1点を選んで具体的に論述せよ。(1)言語（方言を含む）の習得や使用についてどんな意識をもつか。(2)自分と異なった言語や方言を使用する周囲の人々にたいして、どのように対処するか。(3)日本社会における言語使用、その教育について、どのように感じ、考えるか（12月22日締め切り）。

●日本とアジアの諸国とのあいだの物流がアジアの人々の生活におおきな影響を与えている。授業ではマングローブ林とエビ養殖を話題としたが、同様の問題を具体的な例を挙げて、文献を参考にして、事実を指摘し、問題点につき諸君の見解を述べよ（1月15日締め切り）。

●アフリカへの援助（経済、教育など）において日本、そして諸君は何をどのようになすべきか。具体例（郵政省の事業）などを分析のうえ、提言をまとめよ。／第三世界の債務地獄、ヤシ油の利用、植林、焼き畑の問題など、授業で指摘された問題につき個別に調べ、問題点を指摘せよ（鈴木先生、安食先生の授業との関連も考慮に入れるとよい）（1月15日締め切り）。

●1－2ケ月間の新聞紙上における華僑、華人関係の記事をスクラップにして整理し、何が問題となっているか、それがどのように伝えられているか、また数量や傾向など気のついた点をまとめ、参考図書をも利用して論評せよ（1月20日締め切り）。

●サンゴ礁地域での生活の知恵は、諸君の現実の生活にとって参考になる教訓を含んでいる。豊かさとはなにか、自然との調和とはなにか、環境と人間との関係はいかにあるべきか、貨幣経済の浸透とサンゴ礁での生活は両立するのか、など具体的に文献を参照し、得た知見を盛り込んで、諸君ひとりひとりの見解をまとめたい（2月6日締め切り。以下同じ）。

●フィジーは観光地として日本人にとってもなじみのある南太平洋の島国である。旅行案内などに書かれているフィジーは、美しいサンゴ礁の海、南海の楽園、明るくて陽気なメラネシア人といったものであり、一方そうした現代フィジーを作り上げたものとして、キリスト教文化の受容があげられている。こうしたイメージは確かに現代フィジーの一面ではあるかもしれないが、サンゴ礁の海やキリスト教がフィジー人の伝統文化にとってどのような意味をもっていたか、といったことについては考えられていない。旅行案内書や参考図書を比べて、こうした観光地のイメージと現代フィジー社会の現状とを対比して論じたい。

●1980年代後半、“ジャンパン・アズ・ナンバー・ワン”と日本の経済的優位がもてはやされてアメリカの衰退が叫ばれたのもいまは昔、アメリカ経済が再生する一方で今度は日本が戦後最大の不況状況に見回れ、製造業の海外移転にともない国内産業の空洞化が進行するなかで、戦後の経済成長を指導してきた官僚制の弊害が抜き差しならないところまできています。さらに阪神大震災、一連のオウム事件、O－157騒ぎと続き、「安全な日本社会」の神話が崩れました。他方、経済のボーダーレス化は人の国際移動を高めます。不況の深刻化にかかわらず、閉鎖社会日本はますます多様化への対応を迫られています。もちろんアメリカ衰退論も依然として有効ですが、産業構造の変化や多様化への対応、さらには危機管理の先進国として、今まで以上にアメリカ合衆国の経験から学ぶ必要がたかまっているようです。アメリカ合衆国の経験を生かして、日本をどうすべきか論じてもらいます。

●イギリスの伝統として有名なもの、たとえばティーブレイク、階級制度、ユーモアの精神、イギリスの英語、演劇、パブなども時代とともに大きく変化している。あなたの興味のあるイギリス独特の文化現象をひとつ取り上げて、それがイギリスの歴史的、社会的な面をどのよう

に反映してきたか、また目下どのような変化が起きているかについて、参考文献や教官の見聞を参照して考察しなさい。
●採取狩猟生活の現場を見て、諸君は自分たちの普段の生活の陰になにが隠されているか、自分たちがいかに無関心、無意識に“普通”の生活を送っているかに気がついただろう。自分はいままでどんなことをやってきた（こなかった）か、それによってどんな知識と技能を獲得し、それをどう利用し（むしろ利用せずに）過ごしてきたか、そもそも学校で学んで来たことは何の役に立っているのか、何もせずに暮らしてこれたとすれば、それはなぜなのか、といった疑問について、自分や周囲の具体的事例を分析しながら考えてみてください。
●MRTP の資料をインターネットを利用して検索し、集めた資料をもとに、自らの MRTP 像を呈示し、教官の説明との異動を検討しなさい。なおレポートには引用した情報の情報源も明記すること。

こうしたリポートの提出と並んで、期末には学生の出席を確認し、必要な知識が吸収・習得されたことを確認する目的で筆記試験による客観テストを実施している。この筆記試験問題の水準をご理解いただくための参考資料を、［資料９］に示す。筆記試験となると目の色を変えて取り組み、その際に当方がする注意などには、うるさいじゃまするなといった態度でまったく耳を傾けない、という当今学生気質、そしてリポートのちゃらんぽらんさ（前期の「比較文化」でせっかく論文の体裁と内容を叩き込んだのに、後期のリポートにはその経験がまったく生かされない）とはあまりに対照的な筆記試験への異様なまでの執着ぶりには、この国の受験体制が作り出してしまった歪んだ教育観が今年も露呈した。例えば野中先生のリポート課題［資料８の最後からふたつめのもの］などは、そうしたこの国での教育の常識に対して、学生の素朴な疑問を喚起する目的があったわけだが、その意図を完全に取り違えて、自分のこれまでの人生を、なんら疑問も問題意識もないままに履歴書よろしく書き付けて、それでリポートの課題を果たしたものと勘違いした学生も少なからず散見された。

［資料９］筆記試験で学生に穴埋めとして記述を求めた述語［試験問題そのものは、紙面の関係で省略する。出題は講師の日程順。各講師が６－７題程度の穴埋め問題を出題した。］
１．モノ・カルチャー／２．モノ・イクスポート／３．交易条件／４．シンガー・フレビッシュ命題／５．チタナカーン・マイ／６．価格統制廃止／７．国営企業改革／８．劉少奇／９．一人っ子／10．太子／11．鼻／12．茶番／13．道教／14．経済／15．教育制度／16．シンボル機能／17．マレー／18．英／19．国／20．公用／21．水産／22．ミルクフィッシュ／23．”６”／24．インドネシア／25．漁業／26．ジャワ島／27．集約／28．台湾／29．ベルリン会議／30．コンゴ／31．ベルギー／32．レオポルド２世／33．“53”／34．ルワンダ／35．ナツメヤシ／36．高／37．低／38．礫／39．堡礁／40．ラグーン／41．礁湖／42．ココヤシ／43．タロイモ／44．第３中国論／45．エキスターナル・チャイナ／56．中華経済圏／57．香港／58．シンガポール／59．中華意識／50．華南／51．香木／52．ピーチコマー／53．伝染病／54．ブラック・バーティング／55．19 世紀／56．インド／57．フィジー・インディアン／58．“1620 年”／59．レキシントン／60．アボリショニスト／61．ハーヴァード／62．“57 万４千”／63．ユーモア／64．エスニック・ジョーク／65．変種／66．イースト・エンド／67．アイルランド／68．北部／69．ウェールズ／70．カラハリ／71．サン／72．動・植物／73．狩猟採取／74．定住化／75．植物／76．動物／77．女性／78．弓矢／79．ワナ80．トゥパック・アマル／81．ビクトル・ボライ／82．社会主義／83．キューバ／84．センデロ・ルミノソ

５．総合科目「世界の人々とその暮らし」への学生の評価

年度末の筆記試験では、答案用紙の余白に欄を設け、そこへ授業への感想や批判、提言を書けば、点数を加算すると強調した。批判も罵詈雑言ではない建設的なものや具体的改善要求などは大歓迎という主旨を徹底したためか、本年はかなりの学生が忌憚なき意見を述べてくれた。

全般的にはこの科目は「おもしろいが大変」という、どちらかといえば消極的な評価が、学生たちの多くに浸透している様子だが、これを「大変だがおもしろい」と積極的な反応に変えるのには、結局この5年の努力にも拘わらず失敗したと言わざるを得まい。

いわゆる選択肢による授業アンケートは別途、点検評価委員会によって実施されるので、ここでは自由筆記を優先した。当今の学生気質を知るうえでも貴重な証言もあるので、以下めぼしいものを抽出、整頓のうえ、コメントを試みる［資料10］（なおこの［資料10］は学生向けに掲示した文面そのままであることをお断りする）。なお前期の「比較文化」のリポートのあとがきにも同様の趣向のアンケート結果が得られていたが、こちらは学生に返却したところ、うえのような事情で案に相違してその後学生たちと継続して連絡を取ることができなくなってしまったため、遺憾ながらその記録はここに掲載できない。なお「比較文化」では1996年4月26日に受講した新入生を対象に、研究チームを作るための予備調査を兼ねて、新入生意識調査を実施した。134名の学生から回答が得られており、この数はほぼ合格者と一致する。この調査結果は、新入生を対象とした全学共通教育の目標設定のためにけっして無意味ではない。これについては、別途発表できればと考えている［註2］。

［資料10］学生による授業評価とそれへのコメント（[...] は執筆者のコメント）

●全般的に

［好意的意見］

授業内容はよかった／すごいおもろかった。／他の授業より多くのものを吸収できた。こういう授業をもっと増やして欲しい。でも消化不良だったような気もする。／中身が濃すぎて、90分では物足りなかった。／もっと学生の興味をひくようなことをして欲しい［この授業のことではなく、一般論らしい。つまり、この授業のように、という意味らしいが、日本語として、いかにも舌足らずですネェ。ただしこの手の好意的意見は"点数"目的のお上手かも］。／

［否定的意見］

期待していたのに興味のもてない話があった。／一番期待していたのに、何が問題なのか分からない授業があった。［先生が悪いのか、君に問題があるのか、むつかしいところですね］／目からうろこの落ちる話ばかりで、毎回帰って家族に話をしていました。／授業のすすめかたは今のままでよい。／いろいろな先生の話を聞けたのはよいが、自分の都合で出席できなかったのが残念だ。［こういうのは自業自得というのでは？でもこういう学生の意識を改革しないといけないのかナ。なお生物資源学部の学生はほぼ全員が判で押したように途中で脱落した。あるいは悪い成績をつけられやすいこの総合科目を受講すると進級のために悪い影響がある、といった噂が流れたのかもしれない。また本年も医学部受講生は皆無。これも無駄な努力などしない医学部学生の合理主義か。総じて自然科学諸学部の学生には、まったく興味を抱けない、といった感想をつづる学生がなお多く存在しているのは否定できない］。／

［主題別科目群の意義との関連で］

他の授業との関連を考えさせられた［主題別授業の主旨を理解してくれて、ありがとう］。／知らない世界に関心が広がった。／［TV番組の］「不思議発見」と同じようにためになった［開講者としては、絶句ないしは長嘆息...といっても分からないだろうなあ］。／幅ひろくいろいろな話を第一線の先生から伺えたのは収穫だった。とりわけ後半は現代的な話題で大変ためになった。／環境、語学、文化、実体験など多角的なアプローチが自分のなかで交ざってゆくのが体験できた。／ラオスの経済援助の実態が分かったのはよかったが、それがあんまり役に立っていないと知ってがっかりした。／講義を通じて日本がいかに自分たちの知らないところで世界に影響をあたえているのか実感できた［そう言ってもらえると開講した甲斐があったような気がします］。／

［先生方の講義について］

先生がたがみんなすごく熱心だった。外国のことに興味が沸いた（とくにフィジー）。／サンガ先生のアフリカのお話には感動した。／川島先生の話に最も興味をひかれた。アメリカは最先端の国なので、そこでの生活が実感できてよかった［誰がアメリカ合衆国を"最先端"だという先入観を君に植え付けたのかしら。川島先生の話はそんな脳天気な話ではなかったハズなのですがねえ...］。／野中先生のカラハリ砂漠の話は、別の授業では尻切れ蜻蛉だったので、聞けて本当にうれしかった。／加藤先生の授業

でMRTPについてニュースなどでは報道されない全く知らないことを聞けてうれしかった。ニュースやマスコミでは伝えられないことが、世の中にはたくさんあることが分かった。我々はマスコミに躍らされていることもわかった。

●問題点

［時間不足］

内容は濃かったが時間が不足。／先生みんな時間が足りなくてあせっていて早口でノートが取れない。／ひとり2回はやって欲しい。／ラオスの話のように2回は聞かないと十分には分からない。／でもひとり2回では話題が少なくなってしまうので、通年でやって欲しい［2度も無料奉仕をお願いするのは困難なのであります。そんな前向きな先生はこのセチガライ世の中、決して多くはいらっしゃらないのですヨ］。／昼食をつぶしてでも、もっと長く話して欲しかった。90分では時間が不足だ。／時間が足りなくて中途半端だ。／時間を延長するのはやめて欲しい。［まったく対立する意見のあることを知っておくのは無意味ではないでしょう］。／開始時刻をもっと早くすべきだ［1－2限では冬は出席できない、と諸君の先輩がノタモウタから、遅くしたのでアリマス。ヤンヌルカナ］。

［制度的継承について］

このような形式の講義は来年も続けて欲しい。／来年なくなるのはケシカラン［そういっていただけると、開講者としては冥利に尽きますが、本当に冥利なので、イマサラどうしようもありません、悪しからず。残念ながら来年は責任者となっていただける先生を見付けることができませんでした。でも鈴木基義先生が責任者で「太平洋の時代」という新しい総合科目が予定されています。請うご期待］。

［技術的問題］

スライドが分かりやすい。すばらしい映像に魅了された。／スライドをやると暗くてノートが取れない。／スライドのあいだも後ろの電灯はつけと欲しい。／せっかくのスライドなのに、教室が暗くならなくてよく見えない。／もっとスライドが見やすい教室でやって欲しい。／スライドなどの準備がちゃんとできていないのは不真面目だ［知らない人が始めてマガジンにスライド詰めると、必ず失敗するのでアリマス］。／担当の先生が暗幕の仕方やスクリーンの降ろし方をしらなかった。準備不足だ［お気持ちはわかりますが、毎回の興業のために、当方がどんなに苦労してるかも少しはわかってくださいヨ、なんて今の学生さん相手に愚痴をこぼしても無駄ですね。お客様は神様ですから。190番教室はいろんなスィッチが教室中あちこちに散らばっているので、スライド係りは教室の後ろにある暗幕スイッチを操作し、同時に教室の前にある電灯のスイッチのところまで走っていって操作せねばならず。つまり教室狭しと駆けまわらないといけないのですが、真っ暗になってどうやって階段教室を走れとおっしゃるのデスか。階段で躓つまずいて、スネに打撲症まで負っても文句いわずに痛みを我慢してスライド係をしていたのですヨ。あとで見たらスボンが血で真っ赤に染まってた、なんていってボヤイたってダメだな。また教室を使い慣れていない先生はスィッチが分からないので電灯を全部消してしまうし、せっかく暗幕をすこし開けておくと、今度はかならずスライドがよく見えないという反対の批判にさらされる。トホホ。これだけ苦労して準備不足なんて言われるとは... 意気消沈デアリマス。今後の設備改善のときには、ぜひとも現場の先生の意見を取り入れて工事をしてもらえるように、委員会の席で発言しておきました］。／音声資料のなかったのが残念だ［野中先生のときは、ヴィデオが不調でせっかくのサン族の子供たちの歌が聞こえず、本当に残念でした。ごめんなさい］。

［お説教について］

自分たちの授業をうける姿勢のなってないことを叱られたことがあったが、まじめに聴こうと思っていた学生まで十把ひとからげにしていっしょに怒られたのは不愉快だった。／あの所為で次ぎから学生の数がガクッと減ったのは逆効果で無意味だった。／質問も受けたくないという高飛車な捨てぜりふの態度は頭にきた。／せっかく海外青年協力隊の話を聞けてよかったのに、先生が文句を吐き捨てて教室を出て行ってしまったのにはムカツイた。［学生を叱るのも当今ではむずかしいことですネ。ご立腹と叱責とは別なはずですが...］。／

この授業は自分にとってあくまでもスタートで、今後自分でいろいろと発展させてゆくためのきっかけとなった。大学での勉強に方向が見えて来た［こういう感想がひとつでもあると、本当に救われます。ありがとう］。

●具体的指摘

［ハンド・アウトについて］

問題点の箇条書き、穴埋め式のプリントが良かった。／プリントは書き込み式にして欲しい［今やこういう時代なのですねエ... 昔ながらの大学の講義なんか、これではモウ通用しませんねエ、と深い感慨に浸される感想でした...］。

［補講について］

テスト前の補講はやめろ。／補講を9－10限にやるのは困る［でもそれ以前だったら皆さん別の授業があるでしょうに。一体どうしろというのだ。全く。みんなが自分勝手を言うのが民主主義なのですかね、と悪態のひとつもつきたくなります］。／補講は正規の時間でやって欲しい［どないして... それが無理だから「補講」するんでしょうが。ほとんど絶句ですねエ］。／補講に出られなくて残念だった［統合教育科目では、自分で選択するという姿勢も大切でしょう。でも選択することに犠牲は不可欠ですよね。それが人生ヤ、というのを分かってもらいたかったのですが。ケーブル・テレビ百チャンネルを全部見るのはもとより不可能というものですナ。今の世の中はそういう贅沢貧乏なのデス］。

［リポート課題について］

リポート3通はきつすぎる［昔は（といってもほんの5年前には）4通でも文句は出なかったのですが］。／リポートが多すぎて下調べがきちんとできなかったから、この授業は有意義ではなかった。／リポートさえなかった、もっと多くの聴講者がいたはずなのに残念だ［でも2ケ月に1通ですよ。そしてサンガ先生からは逆に、あんないいかげんなリポートで単位がとれる日本の大学がおかしいとの厳しいご批判を頂戴しました。百科事典の書き写しか先生のオシャベリの復唱以外の課題は困るなんて不満を言うほうが、日本列島という井戸の中の蛙かもしれないよ］。／リポートが嫌で皆なやめてしまった。もっと気楽に受けられるようにして欲しい。／インターネットで資料を集めろなんていう無理なリポートの課題はやめてもらいたい。［情報教育もこうした意見のまえには形無しです］。／リポートの課題の呈示が遅い。／掲示と授業中の説明が違う。／授業中に説明のなかったことについてのリポートは困る。／リポートの課題は授業当日には示して欲しい。さもないと準備の時間がなくなる。［まことにごもっとも。開講責任者の努力不足を反省しております］。／リポートの課題がむつかしすぎる。でもかえって勉強になったから良かったかもしれない。／リポートの課題の掲示がきちんとされていて良かった。／［イヤハや学生さん次第でこれだけ矛盾した意見を聞かされると、最後の感想など皮肉かと疑いたくなってしまいます］。／自分もリポートの書き方をすごく考えて勉強しているのだから、先生もすこしは勉強して欲しい［本年最高の意味不明な感想でした。何が言いたいのか補足してください］。／最後のほうのリポートは締め切りまでに余裕がなかった［成績提出期限があるので、何とも仕方がありません。悪しからず。こんなことにも今や教師はスンマセンと謝らねばならない御時世なのですね。トホホ...］。／リポートは3通だせばよかったので、3回しか授業に出席しないで良いというのは先生にたいして失礼だ。何とかすべきだ／［3回しか出席しないのはキミの勝手。筆記試験で泣いた人もいますが。出席してもノートが取れてなければ無意味なはず］。

［筆記試験について］

筆記テストが全くできなかった。無茶苦茶だ。むつかしすぎる。／ノートが取れていなかったことが筆記試験で分かった。／ちゃんと出席したのに、筆記試験ができなく単位がとれなかったら、たまらない。リポートでも苦労したのに。なんとかして欲しい。／筆記テストがむつかしすぎる。でも勉強になったからいいか。／スライドで教室が暗いからノートが取れない。そこで言ったことを試験にだすのはズルイ［電灯もないところでちゃんとフィールドの記録を取っている人類学者や犬養道子さんの苦労（『国境線のうえで考える』岩波書店）なんて今日の、恵まれすぎた日本人学生の皆さんとは無縁なのですネ、と悪態のひとつもつきたくなる。いったいつから、こんなに日本の子供たちは甘やかされてしまったのか...］。

［出席確認について］

せっかく毎回出席してやったのに、筆記テストが友人の助けを借りればできるのはインチキだ。ちゃんと出席してやったのだから、そのことをきちんと出席点として評価して欲しい。毎回の授業の感想を書かせれば筆跡で本人だと分かるはずだ［毎回それを開講責任者に要求するつもりですか。こういう権利意識は不毛やと思うンやけどネエ。筆記試験で助け合いを許可したのは、(1)みなさんが助けあうという経験をまったくもっていないこと、(2)筆記試験で差をつけて序列を決定するシステムがもはや実社会では有害無益なこと、(3)正解も分からぬままで学期末を迎えるよりは、すこしはひとりひとりに利口になって春休みを迎えてほしいからだ、と説明したはずですが、答案に夢中で聞いてはおられ

ませんでしたか。当然のことながら、3回出席しただけではできっこない筆記試験をいたしました]。

[取り上げた話題について]

アジアの話ばかりではおもしろくない[そういうアジア蔑視が困るのだけどなア]。普段情報の入りにくいアジアの現状を知ることができて、とても有意義だった。／アジア・オセアニアばかりでヨーロッパがなかった[授業の案内にアジアに焦点を当てると明記していたはずですが]。／世界各地をもっと平均的に扱うべきだ[数年前にはまんべんなくやるように努力していたのですが、そうすると話題が拡散していて焦点がない、という批判を、諸君の先輩から頂戴いたしましたのです]。／日本人がアジアについて知るのは大切だ。でもヨーロッパの話がなかったのは残念だ[人文学部のヨーロッパ・地中海コースで実施している「コースの総合科目」を全学に開放したいものですが、人文学部の専門の授業といまのところ教務の処理上、折り合いがついていません。これは現在のところ人文学部の2年生対象の地域の総合科目ですが、コースの学生は必修、それ以外の学生は人数が許す範囲で選択履修として、全学に開放すれば良い、と私は考えているのですが、各学部の負担義務の問題とからまって、実現はあいにく、なお当分はむずかしそうです。でもヨーロッパなどは西洋史などできちんとした授業がほかに用意されているはずですが。いずれにせよ15回で世界一周は、どう足掻いたって無理ですガナ。教官ひとりの能力の限界もあり。そのあたり分かって戴けませんかしら]。

このように見てくると、半期で1回90分の授業だけでは、学生諸君の要望に到底答えられないことが分かってくる。改善のための将来の課題は以下の3点となろう。

(1) まず東南アジア・オセアニア、ヨーロッパ・地中海、南北アメリカ、東アジアと日本といった4ないし5コース程度の「世界の人々」式の授業開設が要望されていることになる。人文学部では2年生を対象としてコースの総合科目を開設している。事情が許す範囲で、これを全学へと開放することはできないだろうか。「応分の負担」と「全学出動」の義務となるコマ数をカヴァーしたうえであれば、こうした学部授業の共通教育への開放の余地は、なお積極的に追求されるべきだと考える。教務上の管理は現場の実情さえ把握すれば、比較的容易にクリアーできる副次的な問題に過ぎまい。学部授業科目の全学共通教育への開放については、応分の負担や全学出動の義務を疎かにする学部がでるのではないか、との懸念があるのは承知のうえだが、全学がこのような疑心暗鬼と猜疑心に支配されて、ノルマの数値的達成のみに血道をあげて共通教育の運営に従事するようでは、各学部が積極的に総合科目を立ちあげて、共通教育に提供しようという教育改革の夢など、到底実現はおぼつくまい。

(2) また総合科目に出講していただいた教官には、余裕があればそれぞれ共通セミナーを開いていただければ、学生の向学心をうまく汲み取り得るだろうことも、予想できる。この点でも改革案の当初には、全学共通セミナーは全学の有志教官によって自主的に開講していただき、事情が許すならば、学部や大学院のセミナーと重ねてもかまわない、といった自由な発想で計画していた。しかるに全学の改革をめぐる議論のなかで、こうした当初の夢はあえなくついえ去った。その原因は、まず共通セミナーの履修義務づけ(筆者はこれに対して一貫して反対の立場である。セミナーは強制的に学生を履修させても学習効果はあがらない。また意欲のある学生にたいして、セミナーはふたつ以上履修してはならないといった制限を設けざるをえなくなったのも、本末転倒である)、また共通定員の分属を受けた各学部のノルマとか、全学出動のノルマ算定基準作りといった作業が優先されたこと。この結果、現在もはやこうした教官の自主的かつ自発的な「共通セミナー」開講の提案を共通教育として受け止めることが、制度的に著しく困難な事態を招いている。だが最初にノルマ達成ありき、ではなく、自発性ある提案を汲みあげた結果、全学の共通教育がかつての一般教育を補填し拡大したかたちで実現されるべきではなかったのか。もはや理想論と笑われることを覚悟のうえだが、本来こうした教官の自発性を尊重したかたちでカリキュラムは現場

から組み上げてゆくべきものだろう。現在のように「応分の負担」プラス「全学出動分」のノルマを担当者や受け持ち学部が義務としてこなす、という発想で共通教育を運営するかぎり、現場の教官はこうした理想とは掛け離れた抑圧感のもとに置かれざるをえない。それが今回の教育改革の理念とはまったく逆行した遺憾な事態であることも、繰り返すまでもない。

(3)第3に時間割の組み立てについても従来の100分なり90分の授業の機械的な割り当てが教育改革をかえって阻害する様子が伺われる。午前中の1－2、3－4限は学部別の語学演習の時間に並列して1－4限ぶち抜きの総合科目を立て、午後にはこれも時間の許す限りで5－8限ぶち抜きの共通セミナーを実施するといった抜本的な時間割の再編成が本来なら必要だろう。こうした案は一般教育改革の途上では議論されながら、教室運用の問題、非常勤を含めた講師の拘束時間の調整、全学での時間割調整（理系必修の実験などとの時間的整合性）などの障害のため実現しなかった。しかしながら、将来にむけて共通教育の改善をめざし、なお検討される必要があるだろう。

6．将来への課題

本年度の主題Eの運営で当初予定しながら実現できなかった具体的な課題について最後に総括しておきたい。

(1) 主題研究論文集

統合教育部会では当初、学生の主題研究論文を論集のかたちに編集し、予算措置を講じてその発刊を目指すという計画をもっていた。実際に論文のマニュエルまで整理され、ワードプロセッサーによる編集の手引きや文章編集の手引きも準備された。しかるに統合部会は本年度は共通セミナーやカリキュラムの立案に多大な労力を奪われ、結果として論文集の話は立ち消えとなった。また主題Eはこれもすでに述べたような理由で、せっかく学生たちが前期の「比較文化」で公刊に値する研究の端緒を実現していたにもかかわらず、後期の「主題研究」にそれらの成果を接続する意思をもった学生が数人しかおらず、論文集作成という熱気は盛り上がらずにしぼんでしまった。また人文学部教官の場合、実験系でない教官の研究室はあまりに手狭で、学生たちが編集の作業をする場所も機材も揃えられない。本年度も学生たちは自宅やコンピューター・ルームで作業をしていたが、将来これより多くの学生を「主題研究」で指導するとなれば、物理的な制約は大きな障害となるだろう。

(2) 教育改革推進費による図書購入

また、学生用図書の運用に関して混乱が生じており、これは主題別の授業の充実にとってかならずしも楽観を許さない問題を含んでいる。簡単に歴史的経緯を振り返りたい。

従来は一般教育委員会に図書委員会がおかれ、そこで学生用図書費（年額100万円強）にくわえて600万円程度の設備充実費予算を学生用図書の充実に当てていた。しかるに教育改革にともない一般教育の設備充実費という費目は文部省予算から消滅し、かわりに教育改革推進経費が一般費［すなわち恒常］、特別費［要求によって採否の決定が下される部分］に分けて導入された。1995年度には特別費の要求が通ったため、これの8割（約六百万円）ほどを図書費にあてることを条件に、残る金額と一般費はコンピュータ機器の充実に当てることが一般教育委員会に提案されて了承された。しかるに本年はそうした審議のないままに、教育改革予算一般費分をコンピュータ関係に当てる旨の「決定」が「報告」され、また特別費の要求の書類が期日までに提出できなかった（共通教育事務にはこの書類が1995年以降－一般教育の廃止とともに－回らなくなっており、1995年度は人文学部の書類を特例として借用して執行したが、本年度はそうした非常手段をとる余裕もないまま事態が進行した）ため、結果として従来ならば恒常的な使用できた600万円ほどの学生用図書購入費が、自然消滅する事態となった。

これにともなって、本年度は旧来の学科目、総合科目ふくめ、学生用の図書購入の要求そのものが提出されないままで終わるという異常事

態が、そうとも認識されぬまま発生している。来年度以降、この事態が恒常化しないようにくれぐれも配慮する必要があろう。また従来の一般教育時代の申し合わせによれば、総合科目もふくめて輪番で一般教育図書費を傾斜配分することとなっていたが、この措置のその後も（図書委員会が共通教育委員会出席者ではなくなったため、その報告をする場所も消滅したという事情－ないしは機構運営上の欠陥－もあって）不分明なままで推移しつつある。

(3) 総合科目担当者への予算措置の立ち消え

また従来は総合科目の担当者に対しては、別途の予算措置が取られることとなっていた。しかるにこれも事務上の扱いが不明となり、ここ2年ほど予算措置が行われず（ないしは総合科目開講責任者には通知のないままに、どこかで予算が自動的に取り込まれて執行されたものか）、総合科目の運営に関する援助が脆弱化する事態を招いている。（総合科目委員会の廃止もあって）実情はなお把握できていないので、あるいは誤解がある場合には、ご指摘、ご訂正をいただきたいが、一般教育から共通教育への移行の混乱で、現場にはこうした不都合がいくつか生じていることも確認しておきたい。

(4) 非常勤講師の採用に関する審査の合理化

最後に、総合科目ではとりわけ多く採用される非常勤講師の扱いに触れておきたい。従来はいったん採用を認められた講師の資格審査は免除する慣例があったが、事務部の移行に伴って、あらためて履歴書や業績表の提出がもとめられ、長年出講されてきた教官からの不満も聞かれ、現場は苦情処理に苦慮している。また学務専門委員会で、書類の内容にまで立ち入った審査を余儀なくされる事態が発生している。さらに形式上では総合科目の非常勤講師の場合、そのお世話をするのは主題責任者であるが、実際には講師と個人的な関係のない場合も多く、非常勤講師のなかには、事務の繁雑や責任体制の不明確なことに苛立ちを表明される方もある。こうした事態は、わざわざお越しいただく非常勤講師のかたがたに対して三重大学としてあるいは礼を失した対応となりかねない。従来より、たった一回の出講のために多量の繁雑な書類が、それも学務関係、カリキュラム関係、財務関係とバラバラに発送され、また後期の場合には、手当の振り込みが翌年度の予算成立後になるなどの遅延もあって、総合科目開講責任者は、そうしたトラブルの処理にかなりの労力を強いられてきた。共通教育の発足にともない、こうした事務業務の一体化と簡素化を切に期待したい。

(5) 主題別科目の指定図書の設定

なお(2)に述べた事情で、本年度は総合科目「世界の人々とその暮らし」で講師から指定された参考図書を購入することが不可能であった。指定されされた参考図書が付属図書館で見つからない場合、学生の向学心は著しく妨げられる。また、主題別科目での指定図書を一括してその年に限り別置する案も、昨年の報告でも触れたような理由から、付属図書館としては現在その実現には消極的な意見が表明されている。しかしながら、今回の教育改革の一環として、こうした指定図書の扱いは、全学の図書委員会で再考されるべきかと考える。

また一般教育時代には一般教育は部局ではないとの認識から、全学図書委員会に一般教育の意思を伝える手段は存在しなかった。そのなかで少しでも実際の面で意思の疎通を図るべく設置されたのが、一般教育図書委員会であった。しかるに、共通教育機構の発足とともに、共通教育としての図書館運営への発言権は改善されるどころか、（予算的にも）かえってその基礎を失ってしまったに等しいありさまで状況が推移している。

こうした事態に注意を喚起するため、以下、「比較文化」の参考文献[**資料 11**]および担当教官から推薦のあった学生用図書を、参考文献というかたちで、[**資料 12**]に付することとする。一目瞭然だが、従来の日本式の 10 進法の分類ではまったく一緒にならない書籍が、特定の主題のもとに統合される必要が見えるだろう。指定図書の棚を設けていただく必要をあえて再度強調する所以である。またこのリストが 1997 年度以降の担当者や主題E運営のうえでのご参考ともなれば幸である。

［資料　11］比較文化　学生用参照図書

［7月12日（1996）に学生に配布したもの］

夏休み　読書ガイド：本を持って旅に出よう

「国境線」とは何か

犬養道子『国境線のうえで考える』（岩波書店）

今福龍太『荒野のロマネスク』（筑摩書房）［メキシコと米合衆国との国境を越える違法労働者たち］；『移り住む魂たち』（中央公論社）『野生のテクノロジー』（岩波書店）

中田正一『国際交流の新しい風』（岩波新書）

タハール・ベン・ジェルーン『歓迎されない人々 フランスのアラブ人』（晶文社）

ヨーロッパ文明とは何か

阿部良雄『若いヨーロッパ』（中公文庫）『西欧との対話』（レグルス文庫）

内藤正典『アッラーのヨーロッパ』（東京大学出版会）『トルコのものさし日本のものさし』（筑摩書房）大嶋仁『表層意識の都　パリ　1991－1995』（作品社）

上野千鶴子『うわの空　ドイツその日暮らし』（朝日新聞社）

吉田康彦『美辞麗句使うべし』（NHK 出版局）

隣国に生きた人々の歴史を知る

ユエ・ダイユン［楽黛雲］『チャイナ・オデッセイ』（岩波書店上・下）［文革と女性］

アメリカ合衆国を知る

石垣綾子『わが愛、わがアメリカ』（ちくま文庫）

ムルハーン・千栄子『ライブ・アメリカ』（中央公論社）

シオドーラ・クローバー『イシ　北米最後の野生インディアン』（岩波書店）

アジアの未来と世界

四方田犬彦『ストレンジャー・ザン・ニューヨーク』（朝日新聞社）［ニュー・ヨークのアジア人社会と芸術家たち］；『越境のレッスン』（丸善ライブラリー）［国境を越えて活躍する若いアジア知識人、芸術家たちとの対話集］

班　忠義『近くて遠い祖国』（ゆまに書房）

トリン・T・ミンファ『女性・ネイティヴ・他者』（岩波書店）

ガヤトリ・スピヴァク『文化としての他者』（紀伊国屋書店）

アフリカへの旅立ち

ローレンス・ヴァン・デル・ポスト『カラハリの失われた世界』（ちくま文庫）

川田順造『サバンナの博物誌』（ちくま文庫）

マージョリー・ショスタック『ニサ　カラハリの女の物語』（リブロポート）

アイザック・ディネーセン『アフリカの日々』（晶文社）

「日本」という国の位置

ノーマ・フィールド『天皇の逝く国で』（みすず書房）

川村湊『異郷の昭和文学』（岩波新書）；『南洋・樺太の日本文学』（筑摩書房）；『海を渡った日本語』（青土社）

外の視線から日本を再検証する

宮本政於『お役所の掟』；『お役所のご法度』（講談社）『在日日本人』（ジャンパン・タイムズ）および *Straight Jacket Society*（Kôdansha international）

柳原和子（編）『「在外」日本人』（晶文社）

カレン・ヴァン・ウォルフレン『日本／権力構造の謎』（ハヤカワ文庫）

森嶋通夫『イギリスと日本』（岩波新書）

つるみ芳浩『日本企業繁栄の条件』（光文社）

外国人の目から見た日本

ピーター・フランクル『数学放浪記』（晶文社）

ペン・セタリン『わたしは“水玉のシマウマ”カンボジア女性の日本奮闘記』（講談社）サンガ・N・ンゴイ『キルウェ』（中央出版）

キャサリン・サンソム『東京に暮す』（岩波文庫）

オ・ソンファ［呉善花］『スカートの風　日韓摩擦のブラックホール』（三交社）

民族紛争と我々

宮崎　駿『風の谷のナウシカ』（徳間書店：全7巻）；岩明均『寄生獣』（講談社：全6巻）

藤田紘一郎『笑うカイチュウ』（講談社）；多田富雄『免疫の意味論』（青土社）

ホアン・ゴイテイソーロ『サラエボ・ノート』（みすず書房）

栗本英世『民族紛争を生きる人びと』（世界思想社）［スーダン、エチオピア内戦］

国境なき医師団（編）『国境なき医師団は見た』（日本経済新聞社）

小岸昭　『スペインを追われたユダヤ人』（ちくま学芸文庫）；『マラーノの系譜』（みすず）

文学と国境

『越境する世界文学』（河出書房新社）

川本皓嗣・小林康夫（編）『文学の方法』（東京大学出版会）

佐々木英昭（編）『異文化への視線』（名古屋大学出版会）

外国語といかに接するか

梅棹忠夫『実戦・世界言語紀行』（岩波新書）

沼野充義『屋根のうえのバイリンガル』
（筑摩書房）
米原万理『不実な美女か誠実な醜女か』
（徳間書店）
太田雄三『英語と日本人』（講談社学術文庫）
中津瞭子『なんで英語やるの』（文春文庫）
51年目の「戦後」
平川祐弘『西欧の衝撃と日本』；『戦争の海と平和の海』（講談社学術文庫）；『米国大統領への手紙』（新潮社）
イアン・ブルマ『戦争の記憶　日本人とドイツ人』（TBS ブリタニカ）

［資料 12］「総合科目　世界の人々とその暮らし」参考文献

［全般的に］
＊蓮實重彦・山内昌之編『いま、なぜ民族か』東京大学出版会　1994
＊蓮實重彦・山内昌之編『文明の衝突か、共存か』東京大学出版会　1995
＊蓮實重彦・山内昌之編『地中海の誘惑』　東京大学出版会　1996
＊佐々木英昭編『異文化への視線』名古屋大学出版会　1996
［外国語とつきあうには］
＊太田雄三『英語と日本人』講談社学術文庫　1995
＊☆梅棹忠夫『実践・世界言語紀行』　岩波新書　1992
益田純男（編）『言語戦争』大修館書店　1977
フロリアン・クルマス（編）『言葉の経済学』大修館書店　1994
［移民問題への入門として］
＊◎タハール・ベン・ジェルーン『歓迎されない人々　フランスのアラブ人』晶文社　1994
［アフリカ入門］
＊▲サンガ・N・ンゴイ『キルウェ』中央出版　1990
＊サンガ・N・ンゴイ『テンボ　ひとりぼっちのアフリカぞう』アスラン書房　1993
＊◎ローレンス・ヴァン・デル・ポスト『カラハリの失われた世界』ちくま文庫　1994
＊マージョリー・ショスタック『ニサ／カラハリの女の物語』リブロポート　1994
＊☆川田順造『サバンナの博物誌』
ちくま文庫　1993
［日本の青年と国際協力］
青年海外協力隊『黄金の果実』大蔵省出版局　1994
＊◇中田正一『国際協力の新しい風』岩波新書　1990
［開発問題と日本の我々］
佐藤幸男『開発の構造』同文館　1988
村井吉敬『エビと日本人』岩波新書　1988
向後元彦『緑の冒険:砂漠にマングローブを育てる』岩波新書　1988
宮内泰介『エビと食卓の現代史』同文館　1989
日本消費者連盟（編）『飽食日本とアジア』家の光協会　1993
［各地域への視線と日本への反省］
［ヨーロッパ］
＊★森嶋通夫『イギリスと日本』
岩波新書　1977
小林章夫『イギリスの味わい方』
総合法令　1994
高橋哲雄『二つの大聖堂のある町』
ちくま学芸文庫　1992
［中国と日本］
＊ヤー・ディン［亜丁］『赤いコーリャン』
集英社　1990
＊班　忠義［パン・ツォンイ］『曽おばさんの海』朝日新聞社　1992
＊◎ユエ・ダイユン［楽黛雲］『チャイナ・オデッセイ』（上下）岩波書店　1995
［東南アジア／オセアニア］
松本重治（監修）滝川勉（編）『新・東南アジア・ハンドブック』講談社　1988
水島司（編）『暮らしがわかるアジア読本』河出書房新社　1993
須山卓『華僑』NHK ブックス／陸培春『華人網絡』DHC／渡辺利夫（編）『概説華人経済』有斐閣選書
高山純、石川栄吉、高橋康昌　『オセアニア』（地球からの世界史 17）朝日新聞社
石川栄吉（監修）『オセアニア』全 3 巻
石川栄吉（編）『オセアニア世界の伝統と変貌』（民族の世界史 14）山川出版社
［南北アメリカ］
野村達朗『「民族」で読むアメリカ』講談社現代新書　1099
新藤栄一『アメリカ　黄昏の帝国』
岩波新書　363
鈴木直次『アメリカ産業社会の盛衰』
岩波新書　389
佐々木毅『現代アメリカの自画像』
NHK ブックス　389
＊▲石垣綾子『わが愛、わがアメリカ』

ちくま文庫　1991
＊▲★ムルハーン知栄子『おんな教授アメリカ33年』文藝春秋　1992
＊★▲ムルハーン知栄子『ライヴ・アメリカ』中央公論社　1992
伊藤千尋『見える中南米』岩波新書　23
大貫良夫（編）『民族交錯のアメリカ大陸』山川出版社
O．ルイス『貧困の文化』思索社

最後に、主題Eの理念、授業の眼目として、学生に訴えている論点を整理して、主題　Eの本年度の授業報告を終えることとしたい［資料13］。

［資料13］「主題E国際理解と異文化交流」の目標［夏休み前に学生に配布］

(1)　教えられた「知識」の暗記ではない、問題発見、調査行動、報告型の「知」へ
(2)　高等学校までの教育では触れられず、いままで無意識のまま、あたりまえ、自然だと思い込んで来た「日本の国境」という文化的な「壁」に意識を開くこと
(3)　未知の世界への誘い：異文化にすなおに驚く感性、その文化を支える仕組みを理解しようとする知性、さらには価値観や常識を共有しない人々への共感を養う情操を。

●前期「比較文化」で以上（1－3）の発想転換を体得してもらい、後期総合科目「世界の人々とその暮らし」での各論への準備とする。
●前期「比較文化」でのグループ・リポートを基礎として、添削、指導を生かしてさらに完璧なものにブラッシュ・アップし、出来れば後期にワープロ編集のうえ、「主題研究」として論文集にまとめて公刊したい。
●前期のグループ活動、後期の「主題研究」ともに、適切な指導をしていただける教官を早めに見つけたい。できればそれらの教官が開く「共通セミナー」で指導を受けたい。

主題Eとしては、本年度はまだ制度的に十分には学生の勉学の支援体制を整えることができなかった。だが、改革の主旨に照らすならば、通常科目（例えば「比較文化」）、総合科目（例えば「世界の人々とその暮らし」）そして主題Eの「共通セミナー」が三者一体となってはじめて、「主題研究E」をまとめる支援体勢が整うことになるだろう。主題登録をした学生が、以上4つの異なった授業形態の相乗効果から優れた成果を生み出してくれるかどうか。その成否を問うのはなお将来の課題だろう。

（1997年2月15日）

註

［註1］学科目としての「比較文化」の担当コマ数に関して、この場で歴史的経緯を確認したい。学科目「比較文化」は現在の担当者が赴任した1990年以来、一般教育の枠では週1回＝年間2コマで開講されてきた。担当者は「比較文化およびフランス語」として採用された1名の教官であり、この教官は、一般教育で「比較文化」（2コマ）および「フランス語」（4コマ）を担当し、さらに学部での「フランス語」関連授業（4コマ）に加えて、大学院設置後は大学院での「比較文化概論特講」、「比較文化概論演習」（合計2コマ）を担当してきた。

1996年度は学科目としての「比較文化」では通常科目「比較文化」（前期1コマ）、総合科目「世界の人々とその暮らし」（後期1コマ）に加えて、主題研究Eを担当した（これは、本年度は負担コマ数としてカウントしなかったが、1997年度以降、通年で1コマ分としてカウントすることが、統合部会の申合せで合意された。ただしこの申合せは、現実の拘束時間の半分しかカウントしない、という変則的措置であり、また実際に担当する教官の負担を軽減することにはならない、という問題を残している）。学科目「比較文化」は、専任1名で学科目関連の授業をすべて担当しなければならないが、以上のような経緯のため、1996年度の現実の授業負担は、「比較文化」関連科目だけで、1990年度着任時［2コマ］の2倍［実質上4コマ］となるに至った。これはすでに異常事態というべきであり、合計3コマとして便宜的にカウントすれば済む問題ではない。

ところがさらに、1996年9月には、全学の教育改革委員会が呈示した、いわゆる「応分の負担に関する原則」によって、学科目としての「比較文化」は人文学部に分属し、1名の定員をもつこと、また定員1名あたり年間8コマの負担を原則とすることが提案され、11月に全学の承認を得た。一方この間人文学部では現在の「比較文化・フランス語」担当者の転出にともない、1997年度4月1日採用人事として、これまでと同様の授業担当時間で「比較文化・フランス語」担当者1名の新規採用案が6月教授会で可決された。そのうち「比較文化」担当は「週2時間」、すなわち通年で2コマの負担である。

以上の経緯から明らかなように、全学で規定された「応分の負担の原則」による「比較文化」の開講コマ数と、人文学部採用人事書類での1997年度採用者の採用条件との間には、明らかに大きな齟齬が生じるに至った。そうした事態に鑑み、1997年度の運営に関しては、現状を踏襲することが、既に1996年度の共通教育委員会の了承を得ている。また1998年度以降の「比較文化」の扱いは、現在のところ、共通教育機構長預かりとなっている。

経緯は以上であるが、本件に関して、一言確認しておきたい。現実問題として、「比較文化・フランス語」担当者が1名で「比較文化」関連の授業を年間8コマ負担したうえに、さらに共通・専門それぞれのフランス語、大学院をも担当することは、到底不可能である。それ以外の人文学部教官の授業負担（大学院まですべて含めて、ひとりで8－12コマ程度の負担）と比較して、著しい負担過重となるばかりか、人文学部における元来の採用条件（「比較文化」は2コマ）とも大きく隔たることになるからである。この点、1998年度以降の実際の運用に当たって、現場の実情に即した配慮のなされるよう、1996年度の主題E責任者、分科会長として、とくに関係各位にご理解を求めたい。

［註2］比較文化アンケートとして1996年4月26日に実施した質問項目は以下の通り。

(1) 大学をどうやってよりよくするか。諸君のアイディアや提言を。

(2) 三重大学に入って何をしたいか。具体的な計画、目標をあげてみたい。

(3) 卒業までの4（6）年間にこれだけは実現し達成しよう、という計画と年次予定。

(4) 大学生活をいかに組織するか。君自身で何に積極的に係わるか。

(5) 今何を調べたいか。グループをつくって調査し、夏休みあけまでに実現できるような具体案を提案したい。明確な目標意識、夏休みを積極的に利用して、実地調査のできる課題、ひとりでは無理だがグループなら出来そうな課題を諸君から提案して欲しい。［ただし夏休みあけのリポートはまだほんの出発点に過ぎないだろう］

これへの学生の反応は、不十分ながらその一部を、「共通教育はどこへゆく」、『共通教育通信』（三重大学）2号、1997に発表の予定（印刷中）である。

また今後内実を与えてゆくべき新カリキュラムの主旨が、なお全学的に十分には認識されておらず、また全学的な討議の話題にもなっていないままなおざりにされる傾向が見られるのは、看過しえない。この点については「臨時教育審議会答申後の一般教育改革」『三重大学50年史』（1997年発刊予定）のコラム原稿で言及した。

［付記および謝辞］

筆者は1990年以来、三重大学の一般教育／共通教育で「比較文化」およびその関連科目の実施に7年間従事する機会を与えられた。もとより至らぬ者とはいえ、誠心誠意授業に努力を傾注することができたことを幸せに思っている。未熟な乱暴者を暖かく見守ってくださった先輩、同僚の皆様、問題児をよく補佐してくださった事務の皆様、そして教育改革に全身全霊を傾けた同志の皆様に、末筆ながら心からの謝辞を表明したい。